郷土ちがさき

第 157 号
発 行　令和５年５月１日
発行者　茅ヶ崎郷土会
会 長　平野文明
編集責任　平野文明

茅ヶ崎の海よもやま話６「根」の話　名取龍彦……２
全国の地名の「中島」を調べる　羽切信夫……６
大岡越前守忠相ノート１　石黒　進……８
下寺尾の松平氏陣屋跡　平野文明……12
風（自由投稿欄）　歌　六首　今井文夫……14
郷土会の事業報告など　染谷倫人　前田照勝……15

金色の陽光が降りそそぐ晩秋の一日
境内に集められている石仏などを見学しました

年を取って体の動きに不自由を感じても、茅ヶ崎郷土会の文化財めぐりに参加できる時代になりました。

今日は二〇二八年五月一日。天気も良いので心ウキウキ、もう集まっているかな～と、いつもの駅改札前に向かいます。といっても、私は自宅にいてイスに寝そべっているのですが。出かけるのは私のアバター（分身）。集まる面々もアバターです。集合場所の改札前は、私がかけている特殊メガネの中にあり、仲間と交わす挨拶は耳に挟んだイヤホンから聞こえます。改札前では山本さんが印刷物を配り始めました。片田さんが資料代を集めています。改札前で目を通した印刷物は、自宅にいる私にも分かります。私と、私のアバターはぴったり同じ体験をするのです。（メタバース・仮想空間）。

私たちは改札を抜け、電車に乗りました。私のアバターが交わす熊澤さんや尾髙さんや前田さんとのおしゃべりはそのまま私の体験です。このあとめぐりを楽しみ、お昼を食べて、終了後は反省会の一杯会。茅ヶ崎駅に戻って解散。実に楽しい一日でした。

そうそう、この文を書いている私はアバターの方です。実物は隣で寝ています。（チャットＧＰＴ・ＡＩが執筆）

（茅ヶ崎郷土会々長　平野文明のアバター）

茅ヶ崎の海　よもやま話（その６）

「根」の話

名取龍彦

１　茅ヶ崎の漁業

私は、忘れられた歴史、失われたり、失われつつある歴史掘り起こし、記録・保存して後世に伝えることが大切だと考えています。純水館茅ヶ崎製糸所に関する研究は、その取り組みのひとつです。もうひとつの記録・保存の取り組みが、茅ヶ崎の海と漁業に関することがらです。

山国の長野県で生まれた私は、海の話、漁の話にとても興味があり、茅ヶ崎漁港で漁師さんたちから様々なお話を聞くことを楽しみにしています。刺し網漁の船、しらす漁の船、わかめ養殖の船に何度か同乗させていただき、写真や動画で撮影したり、取材をさせていただきました。

刺し網漁、しらす漁、わかめの養殖は、茅ヶ崎市のホームページ「ちがさき動画ライブラリー」で『えぼしいわ ものがたり　前編』として見ることができます。ご興味がある方はご覧ください。左はその二次元コードです。

『えぼしいわものがたり　前編』のなかで刺し網漁をしている漁師さんがＨさんです。刺し網漁は、水中に帯状に網を張り、網目に絡んだ魚やえびなどを捕獲する漁法です。Ｈさんは昨年八月に亡くなりました。口数が少なく、近寄りがたい雰囲気を持っていましたが、とても親切に取材に応じてくださり、漁の様子を撮影させていただきました。平成三十（二〇一八）年に茅ヶ崎市社会教育課が行なった『南湖ザミュージアム』（ちがさき丸ごとふるさと発見博物館企画展）では、Ｈさんが市民の皆さんの前で刺し網漁のお話をしました。私が聞き手を務めました。刺し網を会場の南湖公民館に持参して、漁師の仕事、刺し網漁のこと、海のこと等を解説してくださいました。西浜中学校の生徒が職場体験学習でＨさんの船に乗ったこともありました。茅ヶ崎でずっと長い間、刺し網漁を専門にやっていた漁師さんはＨさんだけです。その技術をしっかりと受け渡すことなく、お亡くなりになったと聞きました。茅ヶ崎の漁業文化のひとつが消えてしまったと感じています。もっとたくさんお話を聞いておけばよかったと後悔しています。いつもながら、歴史の記録・保存に関して持っている悔恨と反省です。

茅ヶ崎の海が大きく変化しています。漁師さんのお話です。「むかしは、秋になればサバがガバガバはねちゃって、イナダを釣りに行ってもサバが邪魔しちゃって、仕掛けが下まで落ちていかない。サバが上で（餌を）食っちまうからイナダ（ブリの若魚の名

平成30（2018）年８月４日　４時50分
Ｈさんが操船する刺し網漁の船

前）の棚まで落ちていかない」

魚がいなくなりました。魚が減った原因は海藻がなくなったからです。海藻がなくなったのは、海水温の上昇のためです。冬に海水温が下がらないとカジメやアカモクなどの海藻が成長しません。海藻がない海では魚は育ちません。

十年程前は、姥島（通称：烏帽子岩）の周辺に船で行くと、伸びた海藻がスクリューにからんでしまい大変だったそうです。海藻がからまるとスクリューの回転が悪くなりますから、その都度、海藻を外す作業をしてから漁港に戻って来たそうです。今は海藻が育っていませんから、そんな作業は全く必要ありません。海藻が著しく減少・消失し、繁茂しなくなる現象を「磯焼け」と言います。

「磯焼け」は茅ヶ崎の海だけの現象ではありません。

茅ヶ崎の漁場に活気があふれていた頃の新聞記事(注1)です。

［見出し］待ちに待った　鰤がウンと獲れた　大磯で二万、南湖で八千

［本文］(前略) 尚ほ茅ヶ崎町南湖漁場でも十五日の朝網で八千尾の大漁があり、鰤漁場は有頂天になってゐる。

鰤（ブリ）漁は定置網の一種の大謀網で行われました。大正末期から昭和初期の最盛期には、茅ヶ崎の海でもブリが一日二万尾ぐらい獲れたこともありました（注２）。

２　根

今回は、「茅ヶ崎の海　よもやま話」に何度かご登場いただいた、現役最高齢の漁師さんから聞き取り調査（注３）したことを書きます。

茅ヶ崎で最長老の漁師さんである石坂三郎さんは、昭和九（一九三四）年八月生まれの八八歳です。現在も「渡船えぼし丸」で姥島（通称：烏帽子岩）へ釣り客を運んでいます。お父様が始めた漁業を兄弟で受け継ぎました。小学校卒業後から「角惣丸」に乗り、一本釣り漁をやっていました。初めは動力（エンジン）がなく、二人乗りの手漕ぎの伝馬船でした。主に釣ったのは、アジ、イサキ、メジナ、イシダイ、カサゴ、マハタ、カマス、イナダ、ブリ（イナダが成長したのがブリ）等です。

石坂三郎氏

いい漁師は「手先が二分、勘が八分」とのことです。手先とは、釣り竿で魚を釣りますから手先の器用さです。勘とは魚が沢山いる所を見つけること、潮をよむことです。「勘」が漁師にとって最重要です。魚が集まる所が「根」

です。根は海底に岩礁などの起伏があるところです。茅ヶ崎の海は海岸から砂地が続きます。その海底の砂地から岩礁が出ているのが根です。根には海藻類が育ち、魚が集まります。つまり、良い漁場です。姥島は根が海面上に大きく出ていると思えばよいです。姥島は大小五〇程の島（岩）がある「姥島群島」（「姥島群礁」「姥島岩礁」）です。姥島の周囲は好漁場です。「姥島群島」の一番大きな島にある高い岩が烏帽子岩と呼ばれています。現在、烏帽子岩がある島を「烏帽子本島」とか「本島」と呼ぶこともありますが、石坂さんは烏帽子岩がある「本島」を単に「尾根」と呼びます。姥島の表記は、「乳母島」「姥ヶ島」「元根」「筆岩」「尾根島」等全部で二九通りもあります。（注４）

茅ヶ崎沖の海底にはたくさんの根があります。根には名前がついたものがあります。石坂さんから根の名前、特徴、場所、獲れる魚等をお聞きして地図上にまとめました。茅ヶ崎の漁業に関しては『茅ヶ崎市史』『南湖郷土誌』に詳しい記述がありますが、根に関する記述はありません。本会の平野会長に根に関する記録の存在を確認しました。「見たことがない」との回答でしたので、貴重な記録になります。若い漁師さんに伺ったところ、二四個の根の名前のうち知っているのは五個でした。陸で生活する私たちには直接の関わりはありませんが、消えつつある地名です。

本稿では根の場所がわかる地図を含めて、根に関することがらを紹介しようと思いましたが、茅ヶ崎市漁業協同組合の真間義嘉組合長さんと相談して公開はやめることにしました。理由は、茅ヶ崎の漁場で漁師さんと一般の方々との間にトラブルが増えているためです。最近は茅ヶ崎の海でレジャーを楽しむ人が増えて来ました。茅ヶ崎市漁業協同組合が漁業権を持つ地域の海で、サップ（ＳＵＰ　スタンドアップパドルボードの略。サーフボードより少し大きいボードの上に立ち、パドルを漕いで水面を進むことができる）やカヌーで釣りをする人が増加しています。漁師さんにとっては安全、生活に関わる重要な問題です。根は魚が集まるポイントですから、トラブルを避けるために根の位置など細かな情報は公開しないのがよいと判断しました。

根の名前と特徴だけ紹介します。

①うずむし　二つの根がある。

②たいね　鯛が獲れた？　春の大潮で潮が引いた時は海面下一〇㍍くらいになる。漁船が座礁する危険があるので漁師さんは「たいね」を注意している。

③うちたいね　うちにある「たいね」？　「うちでね」とも呼ぶ。

④くそくね　「九そく」か？　「そく」は長さの単位のようですが不明。一そくは一五〇㍍位か？　石坂さん以外の漁師さんは「そく」を知りませんでした。　海岸から九そくの距離にある？　『南湖郷土誌』の「定置網と地曳網」（注５）に「六そく根」と「四そく根」の記載がある。

⑤ろっとく　「六そく」か　海岸に近いので地曳網がひっかからないように注意する。

⑥こなかね

⑦西なかね

⑧東なかね

⑨西あかね

⑩あかね

⑪めだくね　めは目　二つの根が並んでいる。

⑫しみず　この根と烏帽子岩(姥島の一番高い岩　石坂さんは「尾

根のばんば」と言う）を結んだ先に清水さんの家がある？
⑬けんさきね
⑭かんざきね
⑮おおね　大きな根　沖からの波がこの根にあたって大きな波になる。サーファーが好む場所。
⑯じゅうに（十二）　海岸から一二そくの距離にある？
⑰じゅうさん（十三）　海岸から一三そくの距離にある？
⑱かけだし　沖に向かって縦に根が並んでいるので、ブリを獲る定置網（大謀網）の「かけだし」に似ているから。「かけだし」は、『南湖郷土誌』の大謀網の解説に「沖の方に、魚を誘い込む網を東西に張る。その魚が入る所から、陸に向かって長い「かけ出し」という垣網をはる。垣網の下部には荒目の網を下げる。この網にブリが当たると、習性で沖に向かって泳ぐ。そうして網の中へ入る」（注６）とあります。
⑲西のきわ
⑳ごろしち
㉑おおごろ
㉒西のまみや
㉓東のまみや
㉔ひらがっけ

若い漁師さんが知っていたのは②③⑤⑭⑮です。

３　根の場所を知る方法

標識のない広い海で、魚が集まる根の場所をどのように知るのでしょうか？ 現在はＧＰＳ（人工衛星を利用して位置を測定）がありますから、数値がわかれば、その場所へ簡単に正確に行くことができます。そして、魚群探知機がありますから、根に頼らなくても魚の居場所がわかります。ＧＰＳや魚群探知機のなかった昔はどうやって根の場所を知ったのでしょうか？それが「やまたて」です。次回はやまたての話です。

石坂さんが魚群探知機のスゴサを知った時の話です。三十年程前のことです。「たいね」の東側で石坂さんを含めた漁師さんたちが伝馬船（櫓漕ぎの小さな船）二〇艘位でアジ釣りをしていました。アジが「入れ食い」でたくさん獲れていましたが、お弁当を食べたあと全く釣れなくなりました。「どうしたのか？」と思っているところへ、片瀬の船が二〇人程の釣り客を乗せてやってきました。このあたりに来たことのない船だったのですが、魚群探知機を持っていました。茅ヶ崎の漁師さんたちが釣っていた「たいね」の反対側（西側）で釣り始めると、入れ食い状態になりました。その時、「機械って、すごいもんだ」と石坂さんは思ったそうです。海の、上の潮の流れと下の潮の流れが変わって、魚の群れが移動したのです。そのことが、漁師さんたちにはわからなかったとのことです。漁師の勘が機械に負けました。現在は、完全に機械に頼る漁業です。

この片瀬の船が、遊漁船の始まりの頃の船です。現在は、茅ヶ崎の漁港にも大きな遊漁船がいくつもあり、利用客が多いです。遊漁船は漁師さんが魚を獲るのではなく、魚を獲る場を提供しているのです。

かつては、近くの海で獲れた魚を、魚屋さんで買っていました。今はスーパーで外国産の魚を買うことが多いです。世界中の海から日本に魚が来ます。茅ヶ崎には魚屋さんが何軒ほど残っているでしょうか？

大正末期の茅ヶ崎の漁師さん（従業者数）は一四九三人、漁船数が一八九艘です（注７）。南湖は漁師さんが特に多い地域です。昭和六十二（一九八七）年発行の『南湖の漁業今昔』（注８）には、九八の漁船名、屋号（家号）等と持ち主、戸主の住所が書かれています。現在茅ヶ崎には六〇人程の漁師さんがいます。

漁業の今と昔、大きな変化です。忘れられ、失われていく歴史があります。

〈注〉

注１『横浜貿易新報』昭和十（一九三五）年三月十六日

注２『南湖郷土誌』茅ヶ崎市文化資料館　平成七（一九九五）年　五〇頁

注３「根」に関する石坂三郎氏からの主な聞き取り調査日は令和五（二〇二三）年四月三日

注４『文化資料館調査研究報告二八』茅ヶ崎市文化資料館　平成三十一（二〇一九）年　『姥島・烏帽子岩の表記について』平山孝通　漢字表記の違いも含めて二九通りの表記がある。

注５『南湖郷土誌』茅ヶ崎市文化資料館　四八頁

注６『南湖郷土誌』茅ヶ崎市文化資料館　五〇頁

注７『茅ヶ崎市史４』通史編　茅ヶ崎市　昭和五十六（一九八一）年　五〇一頁

注８『南湖の漁業今昔』三橋伊勢松　昭和六十二（一九八七）年七月

日本全国一七二四地方自治体にある字・小字の「中島」を調べる

羽切信夫

私は、昭和三十七年（一九六二）十一月、夫婦で静岡県沼津市から神奈川県茅ヶ崎市中島に移住して六十一年が経過しました。茅ヶ崎市では一九七〇年頃から茅ヶ崎郷土会に参加して約五十年活動しています。茅ヶ崎郷土会では平野会長が「茅ヶ崎には二三の近世村がある。その全部の郷土誌を作ろう」と、平成三十年（二〇一八）年の理事会で提案しました。私は賛成し、私の住む「中島村」から初めてくださいと提案。会長以下、全理事が快く賛成してくれて「中島郷土誌」（仮称）の事業を始めて約四年が経過しました。平野会長、理事や加藤幹雄さん（郷土会々員・丸ごとふるさと発見博物館の会々長）など約一〇人が参加して毎月二回程度、うみかぜテラスや市立図書館に集まって作業をしています。参加者が得意とする分野で原稿を書き、ようやく原稿の整理や見

直しの編集作業にこぎつけました。今年の年末までに完成する予定でがんばっています。

私が住んでいる中島という地名に興味を感じて、全国一七二四地方自治体(政府統計 e―Stat 令和五年四月二十一日現在)の市区町村にどのくらい「中島」があるか調査しました。調査資料は日本郵便株式会社発行の『郵便番号簿』(平成二十四年版)に依りました。

「中島」は六八自治体、「中島村」は一自治体、「中嶋」は四自治体、類似の「中島町」「中之島」「中の島」「中島新田」「中島新町」などが三九自治体ありました。

神奈川県では「中島」は川崎市川崎区、茅ヶ崎市の二自治体、「中島町」は横浜市南区の一自治体のみでした。

中島(六八)

北海道（三）　江別市、亀田郡七飯町、広尾郡大樹町
青森県（一）　南津軽郡藤崎町
岩手県（二）　下閉伊郡岩泉町、紫波郡紫波町
宮城県（三）　石巻市、伊具郡丸森町、遠田郡涌谷町
山形県（三）　尾花沢市、西置賜郡飯豊町、西置賜郡川西町
福島県（四）　喜多方市、白河市、伊達郡川俣町、西白河郡
茨城県（二）　稲敷市、つくばみらい市
栃木県（一）　小山市
埼玉県（五）　さいたま市桜区、越谷市、幸手市、吉川市、南埼玉郡宮代町
千葉県（三）　勝浦市、木更津市、君津市
神奈川県（二）　川崎市川崎区、茅ヶ崎市
山梨県（一）　韮崎市
新潟県（九）　新潟市西蒲区、新潟市東区、阿賀野市、魚沼市、五泉市、三条市、新発田市、燕市、長岡市
富山県（二）　富山市、氷見市
石川県（一）　能美郡川北町
福井県（一）　吉田郡永平寺町
静岡県（六）　静岡市清水区、伊豆の国市、富士市、三島市、焼津市、駿東郡小山町
愛知県（一）　新城市
三重県（一）　伊勢市
京都府（二）　京都市伏見区、久世郡久御山町
大阪府（一）　西淀川区
兵庫県（二）　高砂市、佐用郡佐用町
和歌山県（二）　和歌山市、岩出市
鳥取県（一）　米子市
岡山県（五）　岡山市中区、赤磐市、倉敷市、津山市、真庭市
福岡県（一）　北九州市小倉北区
熊本県（一）　菊池郡大津町

中島村(一)

福島県（一）　西白河郡

中嶋(四)

宮城県（一）　加美郡加美町
秋田県（二）　能代市、南秋田郡八郎潟町
和歌山県（一）　西牟婁郡白浜町

中島町など(三九)

北海道（六）　恵庭市、帯広市、釧路市、滝川市、函館市、室蘭

宮城県（二）　石巻市、柴田郡大河原町
福島県（一）　会津若松市
栃木県（一）　宇都宮市
群馬県（一）　高崎市
千葉県（一）　銚子市
東京都（一）　小平市
神奈川県（一）　横浜市南区
長野県（一）　須坂市
新潟県（一）　阿賀野市
富山県（一）　高岡市
石川県（三）　加賀市、七尾市、白山市
静岡県（二）　浜松市中区、富士宮市
愛知県（五）　名古屋市中村区、岡崎市、刈谷市、豊田市、半田市
京都府（一）　中京区
大阪府（一）　吹田市
兵庫県（三）　神戸市兵庫区、小野市、西宮市
島根県（一）　益田市
広島県（一）　広島市中区
福岡県（一）　大牟田市
熊本県（二）　熊本市西区、八代郡氷川町
大分県（一）　別府市
宮崎県（一）　延岡市

私の知人の鈴木敏治さん（元茅ヶ崎市役所職員・茅ヶ崎の社会教育を考える会々員）は、退職後に奥さんの実家がある石川県七尾市中島町に移住しました。鈴木さんは数年前に、テレビ朝日の土曜日十八時から放映されている「人生の楽園」に農民版画家として紹介されました。（二〇二三年四月五日　記）

大岡越前守忠相ノート（その一）

従五位下　越前守忠相

石黒　進

茅ヶ崎市では毎年四月、桜の終わる頃に「大岡祭」、最近では「大岡越前祭」と呼ばれる祭礼が行われる。（そもそもは、大正時代に

始まる「贈位祭」という小出村堤で行われる祭りだった。）

大岡越前守忠相は江戸時代に高座郡下大曲村(現在、寒川町内)を領地（「知行」と呼ぶ）としたお旗本の名前だ。「越前」とは律令時代からの国の名、今の都道府県レベルに相当する行政区画の一つだ。だが武家の世では人の名前につけて、その人への尊称となる。「越前守」という意味だ。「守―かみ」とはその国の長官である。「大岡越前守殿」、江戸時代のお侍はこういう尊称で呼ばれていた。では、大岡さんは本当に「越前国の長官」だったのか。

「越前守」とは、もともとは律令官の名称「越前国の国司」という称号である。こう決められたのは古代から中世にかけてのこと、律令と呼ばれる法律体系が、朝廷を中心とする国の秩序・組織を定めていた時代だ。しかし江戸時代にはこの名称はすでに形式化していた。朝廷秩序とは別に、武家政権の政治組織、幕府内での呼称として用いられていた。名誉職的な称号として役職に関係なく使われる。これを「武家官位」という。江戸時代の話にはよく現れるが、戦国時代からすでに使われ始めている。一般にはあまり知られていないようだが。「羽柴筑前守秀吉」、「織田上総介信長」などは多少、有名か。徳川家康の武家官位は藏人介（くろうどのすけ）からはじまり最終的に右大臣にまでなる。最後におまけとしていただいたのが「征夷大将軍」、略して「将軍」。この位だけは特に有名だ。これはもう江戸時代の話になる。

この有名な呼び名、征夷大将軍は臨時の職で（律令制としては日本独自のもので令外官―りょうげのかん―という）、後には名誉職、ご褒美的に与えられるものとなる。武家の棟梁のシンボル的な尊称とされている。江戸時代の歴代将軍も正式な律令官職名は「左大臣」である。

江戸時代には一般のお武家様も偉くなると官位（官職と位階）をもらう。大岡様がいただいた「越前守」という官職は律令制では地方の長官にあたる。当時は国司、国の役所の長官でも、中央政府、朝廷内の肩書きと比べると、地方官の地位はあまり高くないものだった。それでも一応は五位以上、貴族の中に入る。江戸時代でも一応の地位を表していた。

与えてもらう職名は、慣例（前例）というしばりもあるが、基本的には自己申告、そしてそれを承認するのは幕府であった。

本来は朝廷の政治組織の中の役職名（官職名）だから、朝廷がこれを決め、任命するものである。中世末期から戦国時代にかけて、武家の世になってからはそれとは別にこの名前が武家の権威を示すものとして使われるようになる。正式には朝廷に奏上して承認を得るのだ。もちろん謝礼が必要で、これが朝廷の重要な収入源でもあった。勝手に使う人もいたが、それでは自己満足にすぎない、「信用の保証」にはならない。勝手な名告（なの）りではなかったか、としてちょっと話題になるのは織田信長の例だ。信長は始め「上総守」を名告って失敗したという説がある。そう書いた書状が残る、ともいう。上総国は親王任国といって形式的には親王（皇子・皇女）が「守」になる国なのだ。だから、実質的なトップは「介」、名告るなら「上総介」としなくてはならない。これを知らなかった、後に改めた、という。もちろん今度は正式な手続きで謝礼も忘れず「上総介」をいただいたのだろう。（註１）

戦国時代の話題としてはもう一つ、小田原の北条家の祖、伊勢新九郎宗瑞（北条早雲）の話がある。早雲が朝廷に願い出て許された官職は、「左京大夫」だったという。左京職の大夫とは、都の管理責任者、左京の行政長官という意味ではあるが、それとは関

係なく？このころは売買される官職では特に武家に人気があったのだそうだ。（註２）

左京大夫の相当官位は正五位の上から従四位の下である。結構高い。

官職・位階はその人の「格」を表す。律令官職に就くにはそれに相当する「位」が大体決まっている。逆に言えば、「位にふさわしい官職がもらえる」わけだ。武家の棟梁としては「四位・五位」くらいの位階が「相当の地位」になるだろう。こういう関係を「官位相当性」といい、これも大事なので、もう少し詳しく見てみよう。

江戸時代の位階も武家世界でのルールが決まっている。忠相さんがもらったのが「従五位下」、八段階ある四位、五位クラスの最下辺ではある（註３）。しかし律令官の世界では地方官僚の地位は低かった。だから、江戸時代は上級の武家としては四位、五位が相当の地位であった。大名がもらうクラスでもある。

古代でも、律令社会での軍事貴族（武官。衛門府、兵衛府の役人）の正式な官位は、最上位の督（かみ）、佐（すけ）でも五位まで。令外官の「将」で初めて四位に届く。だから江戸時代も、お武家さまの官位は四、五位にとどまる。五位以上は、「貴」、一応貴族だ。三位以上はさらに別格の貴族、公卿となる。江戸時代に公卿の位がもらえたのは徳川家だけだった。

大岡様がもらったのは「五位の下」。さらに追贈、といって明治になってから「従四位」の位を贈られた（追贈の場合、上・下の区別は付けない）。この官位授与が「大岡越前祭」のきっかけになる。今ではあまりピンとこないようだが、これは大したこと、なのだ。一段階アップした、というような話ではない。四位といえば江戸時代では、地方では国持ち大名、中央（徳川家中、つまり「幕府内」）では老中・所司代クラスの官位だった。

三位までは徳川家のみといったが、武家のトップはもちろん徳川宗家（とくがわそうけ）で「従一位左大臣」。そしてそれに「征夷大将軍」がつけ加わる。

将軍世嗣（後継者）の資格を持つ尾張・紀伊徳川家は正三位大納言。水戸徳川家は従三位中納言でこれが「黄門」という唐名（尊称）の由来である。唐名（とうみょう）とは律令の本家、中国での官職名、要するに格好付けである。

官僚も武家も同じで、トップはごく少数、中間層に多数がひしめく。古代末、平安時代の人口は一千万人程度で、中央官庁の総定員は約八一〇〇人、五位以上の貴族（貴）は一二五人程度、閣議に参画できる公卿は十数人だった、という。（註４）

ただし家康様（＝徳川幕府）の定めた「武家法度」には「武家の補任は当官の外たるべし」とある。つまり官位を受けても王臣ではなく将軍家との主従の間柄だ、と定めている（註５）。つまり、朝廷からは律令に定められた官職相当の給付はない、ということだ。これは「武家官位」としては当然のことである。当然「官職名」と自分が担当する（幕府内の）仕事とは関係がない、ということにもなる。

忠相さんは遠国奉行の一つ、伊勢神宮担当の山田奉行となった時（一七一二年）に、官名は「従五位下能登守」を受けた。後に普請奉行から町奉行に転じた時（一七一七年）に、これと同じ官名の同僚がいたので、能登守の名を譲ってここで「越前守」を名告ることになった。こういうことも江戸時代にはごく当たり前だった。基本的には、官名は自己申告で、差し障りがなければ届け出

通り認めてもらえる。そして城中ではその名で呼び合う。例えば「勝海舟殿」ではなく、「勝安房守殿」というように。

ということで、ここは越前の国ではないが、下大曲村の領主様は「大岡越前守」様だったのである。

下大曲村では、江戸城内（殿中）とは別で、「越前守様」と呼ばれることはなかったのではないか。ただの大岡様。だから「大岡祭」と言う方が馴染むのだが、確かにこれでは一般受けしない。そこで「大岡越前祭」と改めた。このほうが通りはよい。

大正元年（一九二一）になって、遺徳が再評価され、称えられて「従四位」を追贈されたのだが、これを記念して、このお祭りが誕生した。それが「贈位祭」、地元は大歓びしたのだった。

お旗本の忠相公を称える大岡越前祭に大名行列が登場するのはなぜか。それは忠相公が寛延元年（一七四八）に一万石の家禄を拝領し大名にまで出世したからだ。江戸時代は一万石以上の殿様を「大名」と呼んだ。室町時代の守護大名や、その後の戦国大名とは違う。格付けはいろいろあるが、国持（国主格）・城主格・無城というランク付けを並べておこう。忠相様はちょうど一万石だから、いわゆる「一国一城の主」では、もちろんない。各地にあった領地が幕府によって整理された後、西大平（岡崎市内）に陣屋とよばれる政庁をおいた。忠相さんはその地の主ではあるが、そこを訪れたことがあるかどうかは分からない。忠相様は、当時としては高齢の七〇歳台で、亡くなるまでの三年間の話だから訪れなかったのだろう。大名行列を行ったことは無かった。

幕府の重職者で江戸定府（江戸常勤）だから、茅ヶ崎の所領も訪れたことはなかったのではないか、とも言われる。しかし、地元には、生家の御領地、高田村の本在寺にまず寄ってから身なりを整え、改めて堤の大岡家の菩提寺、浄見寺に参拝したという言い伝えが残っている。真偽は分からないが。

【注及び参考文献】

註１　ウィキペディア。その書状が残っているという話は別なところで見た記憶がある。

註２　ウィキペディア及び今谷　明著『戦国大名と天皇』講談社学術文庫二〇〇一年刊

註３　律令時代の位階の常識を詳しく言えばきりがないが、要点だけ示すと、

・一位～三位――上級貴族（徳川家一族）

・四位～五位――官僚としての武家のトップ層。次のように八段階に分かれている。

正四位上、正四位下。従四位上、従四位下。

正五位上、正五位下。従五位上、従五位下。

・六位以下は「下級官人」で省略。

註４　『日本史のライブラリー』東京法令出版　六五頁）

註５　笹間良彦著『江戸幕府役職集成』雄山閣一九七六年刊）

及川祥平著「ゆかり」の人物にちなむ祭礼―茅ヶ崎市の大岡越前祭を事例に」成城大学民俗学研究所グローカル研究センター二〇一〇年刊

茅ヶ崎市史ブックレット１２大口勇次郎著『ちがさきと大岡越前守』平成二十二年茅ヶ崎市刊

『大岡越前守忠相と豊川』豊川市桜ヶ丘ミュージアム特別展資料二〇一八年刊

補遺　市内の陣屋跡

下寺尾の松平氏陣屋跡

平野文明

郷土会々報一五五号（令和四年九月一日刊）に、私は「中島の殿屋敷と殿道　及び市内の他事例紹介」の一文を掲載し、市内に伝わる殿屋敷（陣屋跡）六例と蔵屋敷跡（御蔵跡）三例を紹介した。その後、事例の中で、堤村の領主 大岡氏の陣屋跡の位置が間違っていたことが判明し、また下寺尾 松平氏の陣屋跡と「陣屋の池」の位置はさらに詳しく分かった。大岡氏陣屋跡は調査が必要だが、後者については文章を整理し、掲載した図を新たにしてここに再掲しておくことにする。

旧原稿を書くときに町田悦子会員のご助言を頂き、今回も以前に調査された資料を改めてご教授頂き、たびたびにお世話になった。町田さんには改めてお礼を申し上げます。

下寺尾　松平氏陣屋跡・陣屋の池跡

岡崎孝夫会員、樋田豊広会員の未刊行の下寺尾調査に依れば、チョウナイの郷中（ごうなか）に松平氏の「陣屋跡」と「陣屋の池」があり、小字「東」の一画に、昔「蔵屋敷」があったそうである（資料３）。

蔵屋敷については今回は触れないが、陣屋跡と陣屋の池の位置は、令和四年十二月十日に行った、茅ヶ崎郷土会の第三〇三回史跡・文化財めぐり「茅ヶ崎市下寺尾を訪ねる」の折りに現地を確認したので改めてここにその位置を報告しておく。

陣屋跡と陣屋の池について、今までに確認した資料は次のとおりである。

①天正十九年（一五九一）、松平二代忠政は下寺尾村三〇〇石を宛がわれた。『風土記稿』下寺尾の項（資料１）には四代「重継、慶長十二年（一六〇七）当村に生る」とあるので、この頃屋敷を構えていたことになる。

②「陣屋跡（一四三一番地）坂井吉春氏所有　ゲートボール練習場として提供されている。旗本領主松平氏の居所を構えていた処である。その南約五十㍍の場所に用心池があり陣屋の池として昭和四十年代まで存在していた。」（資料２　二三頁）

③「陣屋　松平氏の陣屋で松平氏が徳川家康から領地を拝領して江戸に地割りが出来る前、二代位の間この土地に住んでいた。郷中の処で一四三二番地である。今は土地の人が所有している。その東一四一〇番地の所を南に行き土地が低くなる辺りに松平氏のお蔵があり、そのため蔵を取り囲んで防火の為に用水があった。そこを陣屋の池と呼んでいた。（略）この陣屋の池は昭和三〇年頃までその面影が残っていた。」（資料３）

④町田さんによる郷中に在住のＳ１氏からの聞き取り（資料４）

・陣屋跡　松平氏の陣屋跡は最近までゲートボール場に提供されていましたが、今はＳ２氏の家が建ち、畑も繋がっている高台の一四三一番地でした。

・陣屋の池の跡　Ｓ３氏とＫ氏の家の間の細い道を五〇㍍位南に入ると、通称「陣屋の池坂」と呼ばれている坂道がありました。その坂道を下り始めると、Ｓ１氏が「陣屋の池は此処です」と言って手を広げられました。そこは坂道の西側一三九〇番地で、今は埋めたてられて、Ｍ家の住居になっていました。池の大きさはＭ家がすっぽりと入る位だったそうです。坂道をへだてた東側は、池とは関係ない畑地だったということですので、小さな池だったように思いました。この池は火災の時の用心池として造られ、松平氏の乗馬の飲み水として使われていたという言い伝えがあると説明を受けました。

④は令和三年一月に、町田さんが、下寺尾在住のＳ１氏の案内で陣屋の跡と陣屋の池跡を尋ねられたときのメモである。陣屋跡の地番が③のみ違っているが、他は大体同じ内容である。陣屋は下寺尾一四三一番地の一時ゲートボール場となっていたところ、陣屋の池はその南側の一三九〇番地で、現在は個人住宅が建っている。先に私が会報一五五号の二三頁に掲示した所在地図は不鮮明なので図を新たに描いてここに掲載する。

一つ注意すべきと思ったのは、松平家陣屋と陣屋の池との関係で、両者が同じ時期にあったものとは断定できないだろうということである。池は、先の資料にあるように火災に備えて村で造った用心池だったのだろう。昭和の時代まであったとのことだから、江戸初期の陣屋存続の頃まで遡るものだったとは断定できないと思う。単に「陣屋跡」の近くにある池だったからそのような名が付いていたと考える方が自然のように思われる。

資料１　『風土記稿』　雄山閣版三巻　下寺尾の項二九一頁
資料２　臼井孝之・臼井洋一郎著『白峰寺 寺誌』平成十一年
資料３　岡崎孝夫会員・樋田豊広会員　下寺尾調査（未刊）
資料４　町田悦子会員　令和三年一月の聞き取りメモ（未刊）
図　下寺尾　陣屋跡・陣屋の池所在図

風　自由投稿欄

歌六首

今井文夫

青春を箱根路に賭け力走す
若き血潮に我が血も躍る

にごり酒なみなみつぎて乾杯す
ふたりで祝ふ誕生日の夜

雨戸あけ寒さに耐へて我を待つ
野良のチビちゃんエサやる幸せ

豊後梅薄紅色にほほをそめ
白き花びらこころ鎮まる

雨に濡れ冷たくかすむ山桜
ちらりほらりと春の雪舞う

弥生過ぎひときわ蒼き卯月のそらに
白雲なびくこころ爽やか

茅ヶ崎郷土会の事業報告など

第三〇三回「茅ヶ崎市下寺尾を訪ねる」報告

平野文明

日時　令和四年十二月十日（土）　参加者　一八人

コース　茅ヶ崎駅―香川駅―（徒歩 以下同じ）―①駒寄川―②川津跡（かわづあと）―③西方貝塚など―④七堂伽藍跡碑―⑤下寺尾廃寺跡―⑥西方遺跡（弥生時代の環濠集落跡）―⑦高座郡衙跡（たかくらぐんがあと）―⑧原町のサイノカミ―⑨陣屋の池跡―⑩領主の松平氏陣屋跡―⑪郷中のサイノカミと天王社跡―⑫おもよ井戸跡―⑬十二天社―⑭白峰寺―⑮鎮守の諏訪神社（解散）

今回の見学のポイントは遺跡と江戸時代以降の史跡でした。遺跡は西方貝塚（縄文時代）、環濠集落跡（弥生時代）、下寺尾廃寺跡・高倉郡衙跡（奈良～平安時代）など、江戸時代の史跡は下寺尾村の領主 松平氏の陣屋跡、同家諸代の墓石が残る白峰寺などでした。

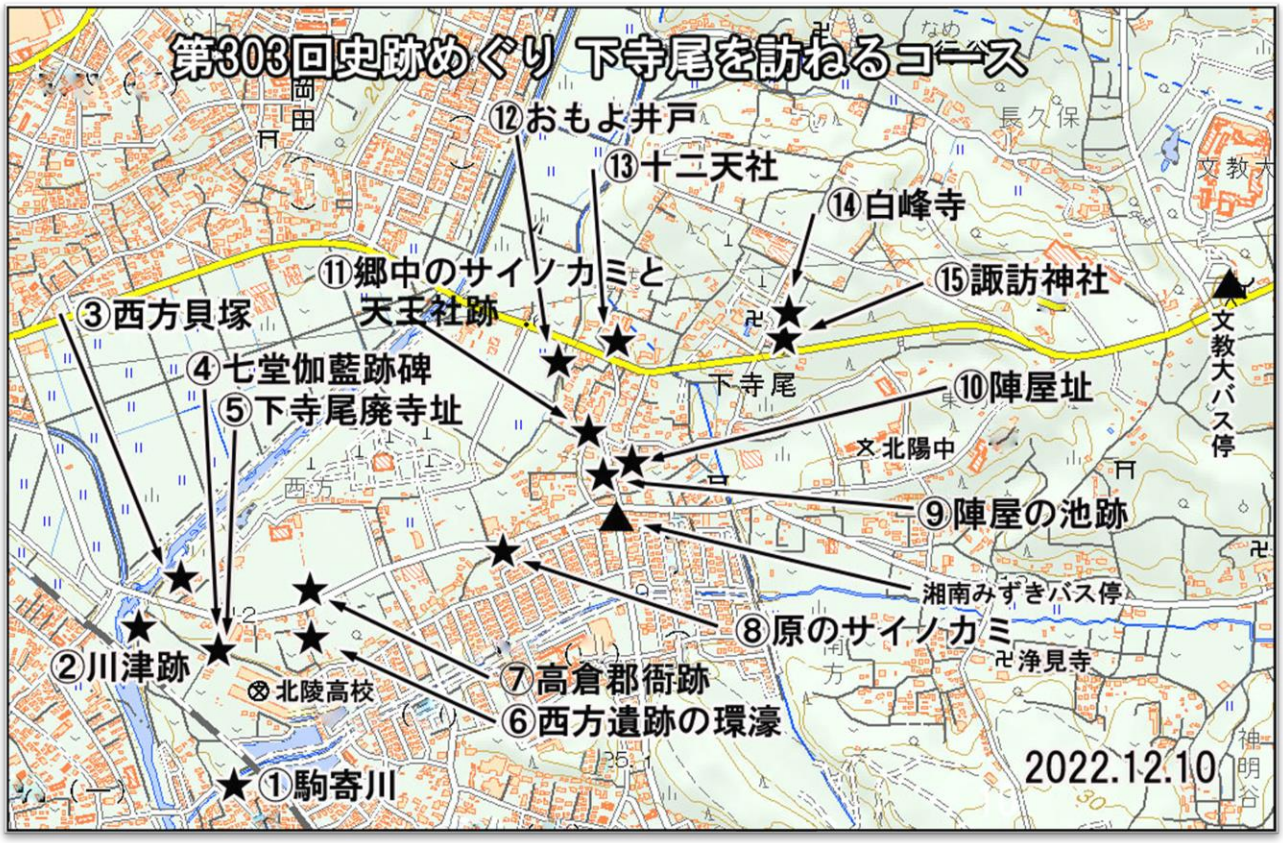
半日コースで一五ヶ所をめぐるのは忙しかったです。また、遺跡が見学地全体の半数ほどを占めていました。下寺尾の遺跡の説明を何回も行っていて、かつ、郷土会と共催事業を重ねている「茅ヶ崎丸ごとふるさと発見博物館の会」に遺跡の説明をお願いしました。おかげで無事に一巡できました。お礼を申し上げます。

事前の勉強会　郷土会の史跡・文化財めぐりは事前に探訪地の勉強会を行います。下寺尾めぐりでは、十一月十五日に市立図書館で行いました。

下寺尾の概況　明治六年（一八七三）に下寺尾、行谷、芹沢、堤が第九小区になり、同二十二年（一八八九）に遠藤（現 藤沢市）を加え小出村になります。小出村は昭和三十年（一九五五）、茅ヶ崎市に合併。昭和三十九年（一九六四）県立北陵高等学校が開校し、昭和五十一年（一九七六）には茅ヶ崎市立北陽中学校が開校しています。

小字は東方、西方、南方、北方。

村組（付き合いの範囲、チョウナイともいう）は池端（いけのはた・いけはた）、原（原チョウとも）、郷中（ごうなか）、北ケ谷（きたげやと）



の四組織があり、それぞれにサイノカミ（道祖神）を祭り、北ヶ谷には十二天が、郷中には天王社などの下宮がかつてありました。

原には「塔の下」など古代寺院に関係する地名があり、小出川・駒寄川近くには「砂流し」、西方貝塚そばに「死馬捨て場」（シバハラともいう）」などの地名もあります。

天保十二年（一八四一）に完成した『新編相模国風土記稿』（以下『風土記稿』と略記）の下寺尾村の項には次のように記されています。

江戸より一五里あまり、当村より北の方二里あまりを隔てて寺尾村（注　綾瀬市）あり。正保（一六四四～四八）の改めには「上」の字を冠す。しからば当時、彼の村に対してこの唱えあり、戸数五三、地頭　松平八十郎勘英（すけひで）。天正十八年（一五九〇）、先祖、孫太夫忠政（二代）賜わる。寛文九年（一六六九）三月、時の地頭　隼人正重継（四代　しげつぐ）検地す。もう一人の地頭は永井幸之助なり。（『茅ヶ崎市史』五巻五八三頁の「第二図 領主の変遷」には元和元年から筧氏も領主として載っています。）

諏訪社　村の鎮守なり。例祭七月二十五日、吉岡村滝岡寺（綾瀬市吉岡にあった真言宗系の当山派修験寺院）持ち。

白峰寺　景徳山と号す。曹洞宗。足柄下郡早川村（現 小田原市）海蔵寺末。本尊阿弥陀。開山は我国、天文十三年（一五四四）九月二十三日卒。開基　古地頭（こじとう）、松平隼人正重継（四代）なり。家譜によるに、重継は忠政（二代）の孫なり。慶長十二年（一六〇七）当村に生まる。始め七十郎と称す。また孫太夫に改む。寛文十一年（一六七一）六月三日卒。年六四歳。境内に葬り、月照院白峯道皓と諡（おくり

な）す。按ずるに、開山我国が卒年を去ることはなはだ遠し、重継は当寺を中興せし人にや。△観音堂　本尊は水晶仏なり、阿弥陀堂、白峰寺持ち。

昭和の時代になって古代の遺跡が見つかり、今も発掘調査が繰り返されています。西方貝塚、弥生時代の環濠集落跡、下寺尾廃寺跡・高倉郡衙跡などの遺跡は国指定の史跡となっている部分もあります。

さあ出発　茅ヶ崎駅出発組も香川駅に九時十二分に到着し、香川駅集合組と合流、挨拶などのあと、旧道をたどって下寺尾に向かいました。旧道といっても住宅地の中です。やがて駒寄川が小出川に合流する辺りの、北に下寺尾廃寺跡や郡衙跡を望む一角で、丸ごと博物館の会々長の加藤さんが遺跡の概略を説明してくれました。すぐ西側を南流する小出川は、寒川町と茅ヶ崎市の境ですが、この辺りは川の東側も寒川分になっています。発掘調査では、小出川河畔から②川津（かわづ　古代の船着き場。高倉郡衙、下寺尾廃寺の荷物の積み下ろし場）跡が確認できたとのことですが、それをうかがわせるものは何もなく、改修されて川幅を広げた小出川を見るだけでした。

やがて、下寺尾から寒川に通じる道路に出て、③西方貝塚の説明がありました。昭和三十八年（一九六三）に縄文時代の住居址の中に堆積した貝塚の発掘調査があり、縄文前期の遺跡と位置づけられました。市内の発掘調査では早い頃のものです。また、付近に、下寺尾廃寺を建てたと伝わる尊勝法親王を葬った大塚があったことや寺尾橋の別名「鐘が橋」の伝説なども紹介されました。

④七堂伽藍碑と⑤下寺尾廃寺跡　下寺尾寺院跡に「七堂伽藍跡」と書かれた、高さ三㍍を越す碑が建っています。この地には「七堂伽藍」といわれた「海円院」という名の古代寺院があったと伝えられていました。建碑は昭和三十二（一九五七）年で、碑の背面に市内各地域、及び、遠藤（藤沢市）、岡田・大曲・一之宮（寒川町）から一三九人の人たちが発起人として名を連ねています（塩原富男著『茅ヶ崎の記念碑』一四頁）。また碑を建てる趣意は「資料の保存と今後研究家の訪れるのを待つため」と記されています。この意を汲んで今も廃寺跡の発掘調査が続けられており、寺院の主要な建物の跡

などが見つかっています。茅ヶ崎郷土会は昭和二十八年（一九五三）に発足しました。発起人、一三九人の中には当時の会員の名前が多数見られます。郷土会の充実ぶりを偲ぶことができます。

なお、下寺尾廃寺跡と次に訪れる西方遺跡・郡衙跡などは平成二十七年に国指定史跡になっています。

⑥西方遺跡(環濠集落)と⑦高座郡の郡衙跡　廃寺跡を見学してから、その後背に広がる台地に登りました。県立北陵高等学校の校庭だった所から奈良時代の建物跡（郡庁院・正倉院など）が発見されて、高座郡（たかくらぐん）の郡衙（ぐんが）の跡と判断されました。また、校舎と校庭を囲む二本の溝が発見され、弥生時代にはこの溝（環濠）に囲まれた集落があったと考えられています。内側の環濠は東西二四〇㍍、南北二三五㍍、外側の環濠は東西四〇〇㍍、南北二六八㍍と推定されており、外側の環濠は南関東で最大の規模だそうです。発掘現場は埋め戻されて、遺跡の様子をうかがわせるものは何もありません。説明に当たった丸ごと博物館の会の皆さんは、発掘時の写真などを使って熱の入った説明をしてくださいました。

⑧原チョウのサイノカミ　遺跡の見学に見入っていて時間が押していました。また北陵高校の前の道路は自動車の往来が激しくて横断できず、目の前に見えているのですがサイノカミにたどり着けません。冒頭にも書いたように、下寺尾は四つの村組（むらぐみ。チョウナイともいう）があり、それぞれの組で一基ずつのサイノカミ（道祖神）を祭っています。原チョウのものは角柱型で「道祖神」と彫ってあり、文化二年（一八〇五）に建てられたものです。

⑨陣屋の池の跡　江戸時代の下寺尾村の領主は松平氏。『風土記稿』の下寺尾村に、四代重継が慶長十二年（一六〇七）に当村に生まれた書いてありますので屋敷があったことになります。その屋敷跡を尋ねることは、今回の目的の一つでした。⑨と⑩は近い所にあります。「松平氏の飼馬の飲み水だった」とか「火災のときのための用心池だった」と伝えられています。池は、南に向かって次第に低くなる道の西側にあり、今は埋め立てられて個人住宅が建っていました。その坂道を「陣屋の池坂」と呼んだそうです（本誌「下寺尾の松平氏陣屋跡」参照）。「陣屋跡の南五〇㍍の場所に用心池があり…、昭和四十年代まで存在…」という記録もあります（白峰寺『寺誌』平成十一年刊）。

⑩松平氏の陣屋跡　⑨陣屋の池の北側にあり、個人の住宅が建っています。『寛政重修諸家譜』（以下『寛政譜』とする）に、分家して二代目の松平忠政が天正十八年（一五九〇）、家康配下の旗本の一人として関東に移り、翌十九年に下寺尾村三〇〇石を宛がわれたとあります。当村で生まれたという四代重継は、社会転覆を謀った由井正雪を討ち取ったそうです。幕府の仕事を辞したあと、「白峯」と号したと『寛政譜』にあります。『風土記稿』には「諡（おくりな）は月照院白峯道皓」とあり、死後、白峰寺に葬られ、白峰寺の開基と書かれています。白峰寺の寺名は重継の号に基づいています。

⑪郷中の天王社とサイノカミ　郷中の三叉路にサイノカミがあります。サイノカミは三叉路に祭られることが多い神様です。二つに折れていますが角柱型で安政二年（一八五五）、「道祖神　氏子中」とありました。サイノカミと並んであったと伝わる天王社はすでに他に移されたのかありませんでした。

⑫おもよ井戸の跡　郷中の集落の西のはずれ、道ばたの草やぶの中に水が少しずつしみ出ているところがあります。おもよ井戸の跡といわれて、次のような伝説が伝わっています。その昔、おもよさんという娘が居たそうな。虫歯に悩み、痛みに耐えかねて井戸に身を投げてしまった。昭和三十年ころまでは水がコンコンと湧いていた。その水でうがいをするとたちどころに歯の痛みが治ると信仰されていた（白峰寺『寺誌』）。昔は湧いている水の量が多くて魚や蛍もいたそうです。

町田会員の調査によると、綾瀬市と海老名市にも「おも井戸（彼の地での呼び方）」があるそうです。郷土会のホームページに紹介していますのでご覧ください。

⑬北ケ谷の十二天社　下寺尾の鎮守は諏訪神社です。鎮守は全村で祭りますが、チョウナイ毎に祭る神霊もあり、下宮（したみや）といいます。十二天社は北ケ谷のチョウナイで祭られています。この社で見るべきは、床下に立ててある大きな石棒です。縄文時代のものです。なぜこのような祭り方をしてあるのか尋ねてみたいものです。

⑭白峰寺（北ケ谷）　『風土記稿』に「開基は地頭の松平重継」とあります。重継は、先に松平家陣屋跡を説明したときの四代重継

伊予松山藩々主 定国書の額「円通」

のことです。卒年は寛文十一年（一六七一）で、開山の我国との間に開きが大きいので、『風土記稿』は「重継は中興か」としています。また、同書には「観音堂に水晶仏を祭る」とも書いてあります。

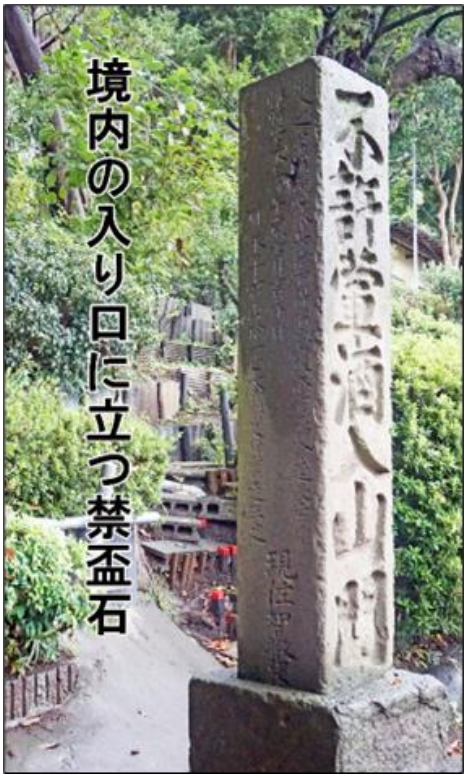
白峰寺は江戸時代から観音信仰の寺として知られていたようです。『白峰寺　寺誌』に天明元年（一七八一）、江戸芝宇田川町の花屋治郎兵衛が唐渡りのガラスの白衣観音を寄進したとあります。『風土記稿』にある「水晶仏」のことでしょう。

このほかにも『白峰寺　寺誌』には白峰寺の観音信仰の事例が次のように列記してあります。

・天明元年（一七八一）五月、伊予（現愛媛県）松山藩の藩主、松平定国（領主の松平家とは別の家です）がこの観音像を礼拝し、後に自ら墨書した「円通」の二字の額を白峰寺に寄進した。
・同年冬、観音堂が建てられた。
・天明二年、観音堂の入仏式開催。
・同年秋、江戸宇田川町の加藤庄次郎義繁、観音霊場記を奉納した。
・同年八月、江戸芝の源助町伊勢屋孫兵衛、子安観音の碑を寺の参道入り口に建立した。（次ページに画像。この碑は今も同じ場所で覆い屋の中に立てられています。）

これらを見ると江戸に白峰寺の信仰が広がっていたようです。寺の裏手の墓地に向かう途中にも「江戸尾張町　坪井［　］」と江戸の商人の名を彫った手水鉢があります。

江戸と白峰寺の結びつきは、境内入り口に立つ安永三年（一七七四）の年銘を持つ禁盃石に次のように彫ってあります。


境内の入り口に立つ禁盃石

「十一世梅薫和尚は江戸に托鉢修行し、大乗経を千部読み、白峰寺の境内に禁盃石を立て、中に妙経典（法華経の中の観世音菩薩普門品のことと思われる）を納め国家安全などを祈る。時に安永三年（一七七四）七月。」この刻銘から、梅薫和尚が江戸で托鉢修行をする中で白峰寺の観音信仰を広めていったのではないかと考えられるのです。松山藩主定国が寄進したという「円通」の額

は本堂内に掲げてありました。私たちは本堂に通して貰い、ご本尊を拝み、この額を拝見しました。

本堂裏手には領主、松平家歴代の墓石が一六基まつられていました。堤村の領主大岡家や、浜之郷村と中島村の領主山岡家の墓地と並ぶ貴重な史跡、文化財です。

ここまで見学してきて、解散予定の十二時を越していました。残念ながら⑮下寺尾の鎮守、諏訪神社は割愛しました。

師走とはいえ天気も良く、暖かい半日を無事に歩き、解散しました。

（令和五年四月一日　記）

参加者の声

「茅ヶ崎市下寺尾を訪ねる」に参加して

茅ヶ崎市香川在住　染谷倫人

茅ヶ崎郷土会に入会して約二年、会報の「郷土ちがさき」を拝読するだけで、郷土会のイベントの参加はありませんでした。今回、日頃散歩している香川から下寺尾の史跡めぐりということで参加をさせていただきました。その感想を習いたての俳句を交えて記させていただきます。

冬日向史跡巡りて今を知る

端的に申せば、この一句が私の感想を集約しています。郷土会の平野会長、そして茅ケ崎まるごと博物館の加藤会長ほか参加者の方々から知らなかった話を聞かせていただき、自分の住んでいるこの地域がどのようにできあがり、現在があるのかを理解しました。

特に印象に残ったのは、めぐみの子幼稚園駐車場脇に立っている「七堂伽藍跡」の説明でした。一九五七年に建立されたものですが、「今回我等が建碑の趣意は是等の貴重な資料の保存と今後研究家の訪れるのを待つ為にほかならない」と。先人は、後世の我々に託したということを深く感じるとともに、今まで疑問に思ってきたことが、溶けるように感じたからです。

県立茅ケ崎北稜高等学校の改築が、建設前の調査で出土品があり中止になったと聞いた時に、どうしてそんな所に高校が立っていたのだろうという疑問でした。この石碑の建碑の一九五七年の約二十年後に市史編纂に伴う考古学調査が行われたとの説明でした。茅ケ崎北稜高校が開校したのが一九六四年でした。先人の思いがすぐに叶っていたならば、茅ケ崎北稜高校は当初から違った場所にあったのかもしれません。現在、臨時校舎の北稜高校もなかったのかなと思うと不思議な感覚です。

移り来し地蔵守るやひめつばき

日頃、車で通る県道四七号線、目にするのは白峰寺の看板で、一度訪ねてみたいなと思っていました。てっきり県道を渡ったらすぐに白峰寺へ向かうものと思っていたら、平野会長が生垣の中に案内しました。人が一人通れるような幅でしたが、中には人の高さほどの地蔵堂があり、お地蔵さまが鎮座していました。そしてそのお堂の両側に山茶花が咲いていました。その場で俳句が浮

かびましたが、その後にこのお地蔵さまが一九七八年に県道の南側から北側に移転されたと聞きました。労をとった方々がお堂の周りに生垣を作り山茶花を植えたのかなと想像しました。山茶花の別名が「ひめつばき」で俳句の季語になっています。花が満開の時に、山茶花に守られたかのように鎮座しているお地蔵様、生垣に囲まれていて見過ごしていました。今回の史跡・文化財巡りで出会えたことに感謝です。

銀杏落葉古寺巡礼の足止める

白峰寺の石段を登った途端、景色が一変しました。地面いっぱいに黄色い銀杏の落葉、そして頭上には黄色く色づいた銀杏の木、一瞬足が止まり、銀杏を踏んでよいのかと躊躇しました。何と最高の時期にこの寺を訪れさせてくれたのだろうかと感動しました。そこで自分たちを古寺巡礼する者になぞらえてこの句を作りました。また、この時期に訪ねたいと思います。さらに、下寺尾村の領主が松平氏であり歴代の墓がここにあることを初めて知りました。

これからは郷土会のイベントに極力参加してこの町のことを少しでも知り、家族や友人にも伝えられたらと思います。つたない俳句を交えた感想でしたが、これからも史跡・文化財めぐりの思い出として投稿できれば幸いです。

第三〇四回「伊勢原市に丸山城址と太田道灌などの史跡を訪ねる」報告

平野文明

日時　令和五年三月十一日（土）　参加者　一五人

コース　茅ヶ崎駅―（相模線）―厚木駅（小田急線）―伊勢原駅下車―（徒歩）―①大慈寺（道灌墓）―②普済寺―③高部屋神社―④丸山城址（昼食）―（徒歩・バス）―⑤洞昌院（道灌墓）―⑥上糟屋神社―⑦時間があれば上杉館跡―（バス）―伊勢原駅―（小田急線・相模線）―茅ヶ崎駅

事前の勉強会　二月二十一日（火）市立図書館第一会議室

このところ茅ヶ崎郷土会の「史跡・文化財めぐり」では、市内めぐりと交互に県内の古城址を訪ねています。まず、令和四年三月十二日（土）三〇〇回めぐりで、◎小机城址（横浜市港北区）◎茅ヶ崎城址（同都筑区）、同年十月八日（土）の三〇一回めぐりで◎玉縄城址（鎌倉市）を訪ねました。その流れで、三〇四回は伊勢原市の丸山城址と近くの太田道灌の遺跡を訪ねました。いつものように茅ヶ崎駅改札前に八時五十分に集合し、相模線、小田急線と乗り継いで厚木駅に着いたのは十時近くでした。

見学地は、江戸時代の村でいえば大住郡下糟屋村と上糟屋村内に当たります。午前中に下糟屋を、午後に上糟屋を訪ねました。伊勢原駅北口から東北方向、徒歩約二十分で渋田川を越えるあたりが下糟屋です。

川に沿って太田道灌の墓所と、墓所を管理する大慈寺があり、そのほかに②普済寺の多宝塔、③高部屋神社（延喜式内社　神仏分離以前は八幡社）、④丸山城址を見学しました。

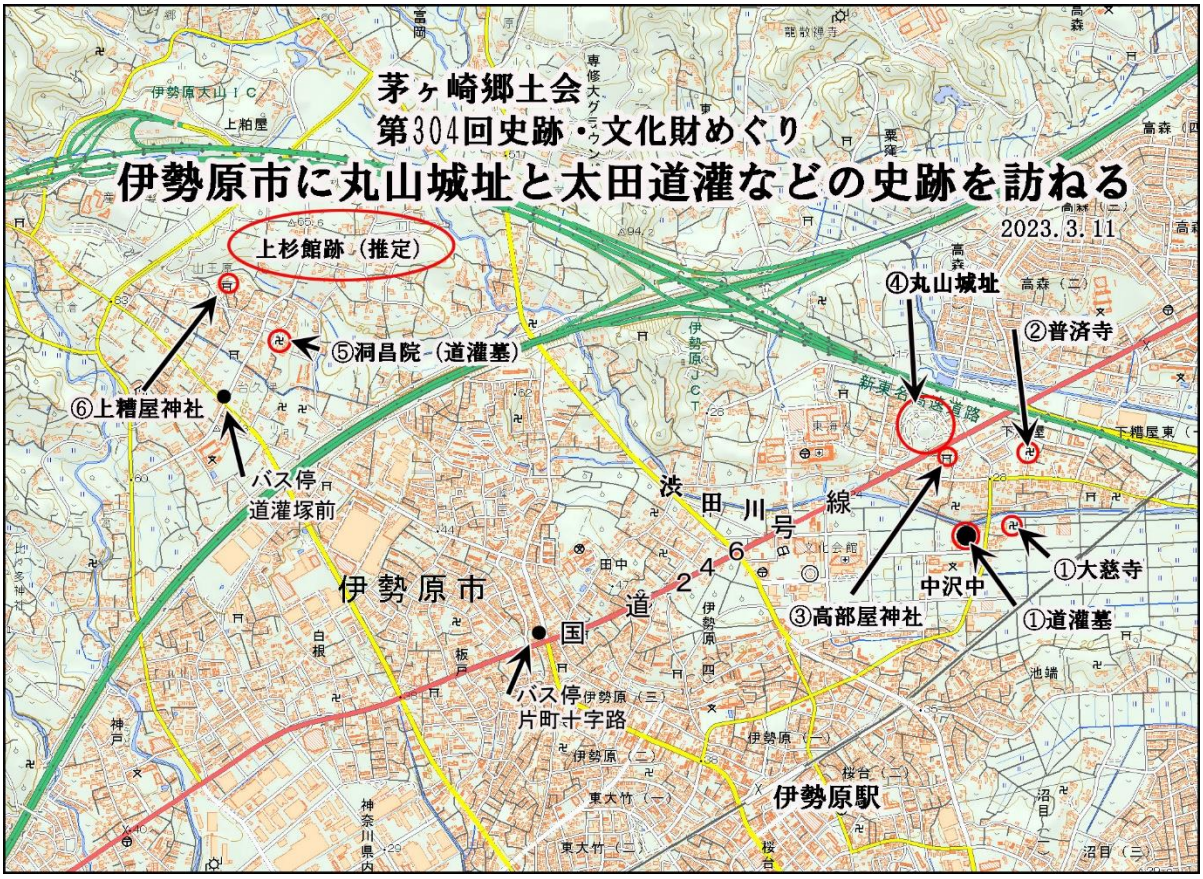
丸山城址で昼食をとり、午後は国道二四六号を歩いて西に進み、上糟屋を目指しました。大山に向かう道路と国道が交差するあたりで大山行きのバスにのり、バス停「道灌塚前」で下車し、洞昌院が管理する⑤太田道灌墓所と、⑥鎮守の上糟屋神社（元は山王権現社）を見学しました。「時間があれば道灌と同時代の、扇ヶ谷上杉氏の館跡といわれている所にも行ってみたい」と触れておいたところ、皆さんく疲れた様子でしたが積極的な反対意見がなかったので、説明者のわがままを通し、足を伸ばしたのです。屋敷跡といわれている一画かと思える所の広い畑に発掘調査の現場がありました。土曜日で調査はお休み、誰も居らず、何を発掘しているのか分からなかったのですが、屋敷跡が見つかるといいなと思いながら現場をあとにしました。おかげで時間が延びて、いつもなら終了後に行う反省会の時間がなくなったのです。ごめんなさい。

今回のめぐりのポイントは次の四点でした。

一、糟屋庄の糟屋有季（かすやありすえ　一二〇〇年頃の人物）

二、上杉館（うえすぎやかた）　扇谷上杉氏定正・太田道灌　↑

↓　対立する山内上杉顕定（一四五〇年頃のこと）



三、丸山城は糟屋有季の城か、上杉定正の城か

四、延喜式内社 高部屋神社について

下糟屋村について『新編相模国風土記稿』（雄山閣版第二巻三七二頁～。以下『風土記稿』と略記）の記事を抜粋して紹介します。

下糟屋村　江戸より十五里、古くは高部屋郷と唱えしという。元暦元年（一一八四）九月、源頼朝、この郷を大山寺領に寄付せし事あり。家数九十一。昔 糟屋氏、代々領せしことは上村（上粕屋村のこと）の条に記す。天文（一五三二～五四）の頃、渡邊岩見守某、地頭たりし事、村内八幡社棟札に見えたり。古は毎月五、十の日、市、立ちしが今、廃す。脇往来四条かかれり。大山道〈西 上糟屋村へ、東 戸田村へ〉　矢倉沢道〈北 愛甲郡愛甲村へ、南 伊勢原村へ〉　田村道などなり。人馬継ぎ立てをなす。

①大慈寺　法雨山と号す〈本寺、建長寺〉。開山覚智。**中興開基太田道灌**〈文明十八年（一四八六）七月二十六日卒。法

名 大慈寺殿心円道灌大居士。この寺号を称ふるは、当寺のみにて、上村 洞昌院及び系譜等、皆洞昌院を号とす〉なり。

先住 東陽が詩文遺校中に、当寺 小鐘（しょうしょう）の序銘あり。これによれば、古くは鎌倉にありしを、道灌この地に移して再興し、**その叔父 周厳**〈天文四年（一五三五）七月十三日、武州安達郡藤波村密厳院に卒、叔悦（しゅくえつ）禅師と諡（おくりな）す〉を請じて、中興開祖とせしなり〈曰く、相模国大住郡糟屋郷 法雨山大慈禅寺、小鐘銘ならびに序に曰く、「旧記を調べてみると、吾が寺は昔、鎌倉にあり、四世周厳禅師は、普明国師（ふみょうこくし＝春屋妙葩）の高弟にて、道灌公の叔父なり。

道灌公は命世之才（めいせいのさい）を抱き、相模の上杉氏の天下を匡（ただ）さんと欲し、以帰正治（この四字読めず）はこの時に当たるなり。寺をこの村に移し、叔父に請いて中興の祖とする。道灌公は誠忠無私といえども、その主（上杉定正）は昏にしてさめず。ついに姦詐の言を信じ、自分の良佐（良臣）を害す。ここに於いて寺門漸頽（ぜんたい＝次第に衰えること）すとしかじか〉。本尊正観音〈運慶作、長二尺〉、道灌の画像一幅〈太田摂津守資順（すけより）筆、寛政八年（一七九六）寄付〉を寺宝とす。

太田道灌墓　村西、白田中にあり、五輪塔三基〈中央一基は長四尺、左右の二基は少し低し〉並ぶ。中央の一基、すなわち道灌の印なり〈左右二基は詳らかならず〉。かたわらに榎の大樹〈囲八尺六寸〉立てり。毎年七月、太田氏より礼奠（れいでん）あり〈道灌墳墓の事、上村 洞昌院に詳載す〉大慈寺持。

くどいようですが『風土記稿』の述べることを整理しますと、

一、昔は糟屋庄を粕屋氏が領知していた。

二、村には大山道、矢倉沢道、田村道がかかっていて人馬継ぎ立てをする宿場だった。五、十の日に市が立った。

三、大慈寺。先の住職、東陽の遺稿の中に、寺の鐘の銘が書いてあって、それによると、大慈寺の中興開基は太田道灌。昔は鎌倉にあったものを道灌が移し、叔父の周厳を迎えて中興開山とした。道灌公は命世の才を抱き、相模の上杉氏の天下をただそうとしたときである。公は誠忠無私であったが、その主（上杉定正）は昏にしてさめず、姦詐の言を信じて、道灌公を害したことから寺はだんだん落ちぶれていった。太田摂津守資順（すけより）が描いた道灌の画像一幅（寛政八年（一七九六）寄付）が寺にあり、寺宝になっている。

四、道灌の墓が村の西の畑の中にある。五輪塔が三基あって、高さ四尺（一二〇センチ）の中央の塔が道灌の墓で、両脇の塔はつまびらかではない。毎年七月に、道灌の子孫の太田氏の供養を受けている。

道灌の墓は上糟屋にもあります。『風土記稿』には二ヶ所にあることの理由は書かれておりません。『史跡と文化財のまち いせはら』（一五九頁。以下『史跡と文化財のまち』と略記）には、「大慈寺と周厳禅師との深いつながりから大慈寺にも供養墓がたてられたのだろう」とあります。大慈寺の所在地は下糟屋三六四です。

下糟屋の中を東西に通る道路の家並みを見ると、昔は宿場だった面影を感じました。

『史跡と文化財のまち』（一五九頁）では、大慈寺の中興開基の周厳淑悦を太田道灌の甥としています。また、同書（一六〇頁）には、道灌と鎌倉との関係を次のように記してあります。

道灌五代の孫、太田英勝尼は、自ら創設した鎌倉扇ヶ谷の英勝寺に「大慈寺殿」とした道灌の位牌を祭った。寺裏に道灌の墓石がある。太田一族は英勝尼と家康との関係から幕府に取り立てられ、大慈寺を守った。

現在の大慈寺の本尊は道灌の持仏だったと言われる聖観音で、南北朝から室町初期とされ、道灌の時代と符合する。平成十二年市指定文化財。

② 千秋山普済寺（臨済宗）下糟屋二三七

『風土記稿』下糟屋村（三七四頁）に次のようにあります。

普済寺（ふさいじ）鎌倉建長寺末。開山は節翁中勵（ちゅうれい？）〈文正元年（一四六六）五月四日卒〉。開基は上杉寺月鑑明公〈上杉氏なるべけれども、俗称を伝えず。かつ卒年月も詳らかならず、十五日を忌日とす〉。本尊　地蔵〈長一尺三寸五分、行基作〉。

境内にとても背の高い石の塔が建っています。江戸時代に幕府は蝦夷地に仏教を広めるため、三つの寺を建て、その一つに、普済寺の住職を派遣しました。その住職、名を文道玄宗といい、任期が終わって帰村した後にこの塔を建てたのだそうです。『史跡と文化財のまち』（一六一頁）に次のような解説が載っています。

多宝塔　今の高さ六㍍で市内で最も高い石造物。天保九年（一八三八）に、高部屋神社（八幡社）の別当寺だった神宮寺に建てられたが、神仏分離で神宮寺は廃寺となり、普済寺に移設された。建立者は神宮寺一四世の文道玄宗和尚。

文道玄宗は幕府の命により、蝦夷地の国泰寺（厚岸町。蝦夷三官寺の一つ。臨済宗。）に七年間住職であった。彼の地の人々のために法華経一千部を書写し、一部を国泰寺に、他は多宝塔を建てて納め、北方の鎮めとすることにしたが、果たさないうちに任期が終わり、帰寺した。そこで神宮寺に多宝塔を完成させた。喜捨した北海道の人々の名、約七〇〇人が刻されている。

③ 高部屋神社　下糟屋二二〇二

『風土記稿』の記事（三七二頁）です。

八幡宮　鎮守なり。延喜式に載りたる。当国十三座の内、高部屋神社なり。

祭神五座　**中央**　①応神天皇〈神体座像　長二寸〉。**右**　②若宮大神〈仁徳天皇　神体束帯〉、③気長足姫大神〈おきながたらしひめのおおかみ　神功皇后〉。**左**　④姫宮大神〈大日霊貴尊おおひるめむち＝天照大神〉、⑤住吉大神〈上筒男命・中筒男命・底筒男命〉なり。例祭七月七日。　弊殿・拝殿あり。

天文二十年（一五五一）九月、地頭渡辺岩見守某　当社造営す〈**棟札**あり、曰く　奉造立　大日本国相州大住郡糟屋庄八幡大菩薩　大檀那　地頭渡邊岩見守、小檀那　代官築城太郎左衛門、別当　律師賀順、大工　明王太郎、本願主　得生、鍛冶　当村　宣朗・助次・吉次・彦右衛門、天文二十年辛亥九月廿八日〉。

社領十石の御朱印は天正十九年（一五九一）十一月賜う。社前に**応永廿八年（一四二一）の石燈籠**あり〈銘に曰く　奉彫造　相州糟屋総社　正一位八幡大菩薩御廟前　石燈籠一基

右意趣者　天地清寧　皇風永扇　殊者同東郡元帥（げんすい）身宮安泰　壽算（じゅさん＝命）綿延　専祈當庄秋山郷地　及藤原某等家門繁栄　親属快楽　天下太平　国土豊饒者也　應永二十八年九月下旬天　勧進主　重先敬白〉。

延喜式内社相模一三社の内の高部屋神社に相当するとされています。江戸時代には「八幡社」と呼ばれていました。祭神は応神天皇、若宮大神、神功皇后、姫宮大神、住吉大神の五柱で、他の八幡宮の神々と変わりません。住吉大神が入っているのは神功皇后の新羅征伐のとき海中に現れ、一行を援護するからです。

天文二十年銘の棟札は今は失われているようです。その銘に「地頭渡辺岩見守某　当社造営す」とあったとありますが、延喜式内社であればこの「造営」は創建ではなく、再興か再建となります。渡辺岩見守某は小田原北条氏の家臣でしょう。

また、応永二十八年の石燈籠も今はありません。文中で「身宮安泰」を祈られている「相模国東郡の元帥」と、「家門繁栄」を祈られている「藤原某など」、及び勧進主の「重先」が誰かは分かりません。しかし応永二十八年の石灯籠となればすこぶる古い石灯籠です。

境内の鐘楼に**至徳三年（一三八六）銘の銅鐘**が吊ってあり、県の重要文化財に指定されています。応永年銘の石灯籠、至徳三年銘の銅鐘などがあるのは、この地の歴史が豊かで、厚い文化を擁しているからでしょう。茅ヶ崎とは違う土地柄を感じます。

拝殿・弊殿と本殿が切り離されているのも最近は見ない様式です。拝殿の向拝（ごはい）の彫刻には浦島太郎と竜宮城の乙姫が登場しています。海から遠い地にあっても海辺の物語を取り上げているのは、新羅征伐をした神功皇后と住吉大神を祭っているからと思われます。

本殿は五間間口になっています。祭神が五柱あるからでしょう。『史跡と文化財のまち』（一五六頁）に、「本殿は関東大震災で倒壊したが、古材で再建された。元の建物に使われていた擬宝珠に正保四年（一六四七）の銘があるのは元の本殿の建築年と考えられる。また上杉定正が寄進した「大乗五部経」の残片が伝えられている」、とも記されています。

また同書（一五七頁）に、普済寺にある多宝塔を建てた文道和尚は社地の一隅に葬られているとありますが、見つけることはできませんでした。

④ 丸山城址（丸山城址公園）伊勢原市下糟屋二二六八－二一

城址公園として整備されています。私たちはここのベンチで昼食をとりました。天気のいい日で、散策の親子連れなども見かけました。

城址と高部屋神社の間を掘り下げて国道二四六号線があります

が、以前は神社と同じレベルの一続きの高台でした。神社が式内社であれば、平安時代から位置は変わっていないはずですから、その一画に、神社を動かすことなく城が構えられたということになります。城は頼朝時代の御家人、**糟屋有季**の館と考えられていました。『風土記稿』下糟屋の項（三七五頁）に次のようにあります。

糟屋左衛門尉有季居跡　（下糟屋村の）西北の方にて、八幡境内より社領の地に係り、東西百間余り、南北百十間余り〈その辺を殿ノ窪と字せり〉。四面に堀の遺形あり。**有季**は将軍 頼朝、及び頼家に仕え、しばしば功ありし事【東鑑】【源平盛衰記】等に見ゆ。〈文治二年（一一八六）九月、源義経の臣、堀 弥太郎景光を生け捕りし、また佐藤四郎兵衛忠信を襲って自戮（じりく）せしめ、正治二年（一二〇〇）正月、梶原平三景時謀叛の時、追討の命を豪り、その余類 安房判官隆重をいけどりす〉。**有季**は、比企判官能員、誅せられし時、彼の一族等と共に自害せり。案ずるに、**この地有季の居跡とのみ伝うれど、その祖、元方〈糟屋庄大夫と称す。詳らかなる事は上村の條に見えたり〉以来の所領なれば、世々ここに居住せしなるべし。**

『史跡と文化財のまち』（一五七頁～）には次のように書かれています。

『風土記稿』に「糟屋有季の居跡」とあり、長年そのように考えられてきた。昭和六十年を初めとして何回かの発掘調査の結果、土塁や堀の址、遺物が発見され、有季の時代の十二～十三世紀と室町時代後半の十五～十六紀の遺跡となった。城としての遺構は室町時代後半（戦国時代）と判明した。また一方、十五世紀の伊勢原には相模国の守護、扇谷上杉氏定正の上杉館があった。館址は上糟屋に伝えられてきたが、時代的には丸山城址もその可能性が出てきたため、今後の調査と研究が待たれるところである。

城址公園の中央部の広場になっているところが郭（くるわ）だったのでしょうが建物の跡は見つかっていないそうです（市教育委員会）。郭の周囲には土塁が部分的に保存されており、横矢掛かりが二ヶ所あります。郭の外は急な崖の切り岸になっており、その下は空堀の跡で、埋め立てられています。

丸山城址公園

上糟屋へ向かう　一旦駅に戻れば上糟屋を通る大山行きのバスがあるのですが、どうせ歩くなら大山行きバスの途中のバス停まで国道二四六号線を歩いても同じだと、側道を一列縦隊で進みました。一キロちょっとの直線距離なのになかなか着かない。目指すバス停「片町十字路」では一同グッタリしてバスを待ちました。降車するバス停は「道灌塚前」で、上糟屋です。

『風土記稿』の上粕屋村（三六五頁～）には次のように記してあります。

土人の伝えに、むかし糟屋藤太**有季**、居住の地なりと伝う〈居跡、下村にあり〉。**村内熊野社に建久七年（一一九六）、有季願主にて鋳造せし鐘あり。**その銘に「大住郡の辺に一伽藍あり。名は極楽寺〈案ずるに別当寺の鐘なり〉、曾祖父、藤原**盛季**の福田（菩提寺）なりとしかじか」とあり。また糟屋系譜に「左大臣冬嗣の孫、**元方**は糟屋庄大夫と称し、**その子、久季**は糟屋庄司」と掲す。これらに依るに、元方、初めて糟屋の庄内に住して、在名を以て称号とし、子孫連綿とこの辺を領せしなり。

宝徳三年（一四五一）〈或いは二年ともあり〉四月、**太田備中守資清（道灌の父）**、長尾左衛門尉景仲、由比ヶ浜にて千葉新介・小田讃岐守・宇都宮肥前守等（鎌倉公方 足利成氏方）と戦い、資清・景仲敗北して糟屋の庄内に引き退く〈【鎌倉大草紙】曰く、太田備中守・長尾左衛門尉、宝徳三年卯月廿一日、その勢五百余騎にて、散々に追い散らされ攻め戦いける。太田備中・長尾左衛門が郎党百廿余人討ち死にして、陣床も取り得ず相州糟屋の庄へ引き退く〉。

江戸より十七里半、家数百三十八。往還五条を通ず。大山道二〈田村通り・長後通り。石蔵にて合す〉、八王子〈武州〉道、荻野道、薬師〈日向〉道。

熊野社　秋山・辻などの鎮守。社領二石の御朱印。

鐘は建久七年（一一九六）、糟屋左兵衛尉有季願主として鋳造す（銘省略）。〈鐘銘の序文に依れば、この鐘、別当寺のために鋳造せし物なれど、今は社前に掛けおけり。〉△観音堂　三十三観音を置く。△熊野社の別当　極楽寺は曹洞宗で洞昌院末。本尊阿弥陀。往昔糟屋**盛季の起立せし事**、前に注記せし鐘銘に見えたり。

『風土記稿』は糟屋有季の館を下糟屋の丸山城址だったとしています。そして「上糟屋の熊野神社には、建久七年（一一九六）に有季が願主となって鋳造した銅鐘があり、その銘に『熊野社の別当寺である極楽寺（熊野社の別当寺）は有季の曾祖父 藤原盛季（糟屋盛季）の菩提寺なり…』とある。また、糟屋系譜には元方、有季と続き有季は糟屋庄司となっているので、元方が糟屋庄に住み、子孫がこの地を領した」としています。

時代が過ぎて、宝徳三年（一四五一）、**道灌の父、資清**は由比ヶ浜で、鎌倉公方 足利成氏方の千葉新介などと戦い、敗れて糟屋

庄内に引き退いたことを紹介していますので、この頃、糟屋庄を扇谷上杉氏が支配していたことが分かります。

今は建久七年銘の鐘はなく、『風土記稿』ができた頃はあったはずの熊野社も極楽寺もないようです。

この日の探訪の目玉である上糟屋の道灌の墓所は、バス停「道灌塚」を降りるとまもなく見つかりました。

⑤洞昌院（上粕屋二一六〇）管理の道灌の墓

上糟屋の墓は「道灌の胴塚」、下糟屋大慈寺管理の墓は「道灌の首塚」と呼ばれているそうです。

『風土記稿』には洞昌院と道灌墓について次のように記してあります。

洞昌院　蟠龍山公所寺〈公所は寺辺の字なり〉と号す。曹洞宗、開山崇旭〈長禄二年（一四五八）三月十五日卒〉。中興陽室照寅（しょういん）〈天文八年（一五三九）七月二日卒〉。**開基は太田左衛門太夫持資入道道灌〈文明十八年（一五四九）七月二十六日卒、法名洞昌院心円道灌〉**なり。釈迦を本尊とす。

【寺宝】△鏡三面〈太田道灌所持の物と云う、三面共に八角にて、至って薄し。裏の図左の如し（図あり）〉。

太田道灌墓　五輪塔〈高三尺五寸許〉、傍らに古松二株〈一は囲一丈六尺、一は一丈〉あり、案ずるに、石塔のさまは当時の物にあらず。後世建てしものと見ゆ。下村（下糟屋村）浅間社別当大慈寺にも道灌の墳墓あれど、当院に埋葬せし事、その証〈**【寛永系譜】**その文、下に註す〉あり。道灌は太田備中守資清の子にして、左衛門太夫持資〈初、資長〉と称す。長禄元年（一四五七）、武州江戸及び川越、岩槻の三城を築く〈**【寛永譜】**曰く、資長、源六郎左衛門大夫、剃髪して道灌と号す。歌人、相州の人なり。長禄元年、城郭を江戸・川越・岩槻に築く〉。道灌、軍法に精（くわし）きをもって、世に師範と称せられ、しばしば軍功あり〈曰く、道灌常に古今諸家の兵書を読みて軍法の道に達し、能く城郭の地を知る。此の故に世に軍法の師範と称す。若年の時より、数度戦功あり〉。**扇谷上杉修理大夫定正に属して用いらる。**故に関東の諸家、大いに服し、関西の諸将もその風を慕う者あり。また和歌を好む〈曰く、道灌もとより扇谷修理大夫定正が招きに応じて関東八州を以てこれを指揮す。定正 深くこれに任じて、よろず大小となく、道灌に聞く。これに依って関東の諸家、心を道灌に寄せずという者なし。関西の諸大将もその風を聞きて付き従う者また多し。道灌、父が風俗を慕いて和歌を好む。これに加うるに諸子百家の史伝、

ならびに本朝二十一代集などの書籍を集め貯めて、平生のもてあそびとす。その詠ずる所の家の集十一巻、その類を分かちて「碎玉類題」と号す。案ずるに、今 道灌の家集と言わば【慕景集】と名付け、僅かに一巻あり、残欠なるか〉。

寛正、文明の間（一四六〇～八七）、両度上洛して将軍義政に謁（えつ）す。その時、勅問の事あり。和歌を詠じて勅答す。太田家譜に曰く、東山殿（将軍足利義政）より勅使来たり、武蔵野の広原について問う。道灌は即、和歌を読み勅使に献ず。その歌

露置かぬ方もありけり夕立の空より広き武蔵野の原

また天皇の勅使来たりて武州の風景を問う。即席に和歌を詠じて勅使に献じて、平昔（昔）見た遊覧（景色）を献ず。その歌に曰く

我庵（いお）は松原つゞき海近く富士の高嶺を軒端にぞ見る

この時の叡感、少なからず。御製を賜る。

武蔵野は かる萱のみと思いしにかゝる言葉の花や咲くらん

案ずるに【慕景集】に嘉吉元年（一四四一）五月、上洛の事見えたり。今、道灌の卒年を以てこれを推（おしはか）るに、十歳の時に当たれり。家集は書写の誤りなるか、おぼつかなし。

文明十八年(一四八六)七月、讒言に依って当所の上杉定正の館にして誅せられ、当院(洞昌院)に葬す。〈【寛永譜】曰、七月廿六日、相州糟屋定正が館に入りて卒す。五十五歳、秋山の**上糟屋洞昌院に荼毘す。**【小田原記】曰、七月廿六日、扇谷殿定正、相州糟屋へ御馬を立てられ、道灌を退治し給う。さるほどに、道灌入道打ち出たりしを、槍にて突き落とし、首を取らんとしければ、道灌槍の柄に取り付いて、

かゝる時さこそ命の惜しからめ兼ねてなき身と思い知らずば

ただ忠のみ有りながら、道灌一朝に（山内上杉顕定の）讒言せられて、百年の命を失うとしかじか。案ずるに、この歌は康正元年（一四五五）冬、藤沢の役に、道灌、敵の首級（しゅきゅう・しるし＝討ち取った首）に手向けし歌なり。

【慕景集】に見ゆ。〉

道灌の墓所にはたくさんの歌碑が建っていました。道灌が歌道にも抜きんでていたという話から、この墓地を歌詠みの聖地として、多くの人たちが建てたものでしょう。『風土記稿』には有名なヤマブキの歌こそ載っていませんが、虚実取り混ぜて、文武に優れていた道灌の一面が描かれています。また『風土記稿』は、道灌が、自分の主である扇谷上杉定正の手にかかって命を落とした原因を、定正が、敵対していた同族の山内上杉顕定の讒言を信じ、自分より有能な道灌に対するねたみ意識としていますが、現在の歴史学ではこの点、どうなっているのか興味があります。

七つ塚　道灌の墓の二〇〇㍍程西にあります。『史跡と文化財のまち』五一頁に、「道灌に殉じた七人の従者を葬ったと伝えられる。七人塚とも呼ばれる」とあります。

⑥ 上糟屋神社　伊勢原市 一三三四

『史跡文化財のまち』五二頁に、「上杉館の鎮守だったと伝わる。江戸期には山王権現、明治期には日枝神社、周辺の神社を合

祀して今は上糟屋神社と社名を変えた」とあります。また『風土記稿』三六七頁には次のように載っています。

「山王社、天平年中（七二九～四九）僧 良弁〈大山寺開山〉の勧請なりという。小名 山王原の鎮守なり。例祭六月廿二日。社領一石五斗の御朱印。槻の大樹〈囲二丈〉を神木とす。吉祥院持ち。」

参道と境内にある樹木の太さ、高さに驚きましたが、ほかには目を引く物はありませんでした。

⑦（時間があれば）、上杉館跡　伊勢原市上粕屋

太田道灌は扇谷上杉家に家宰（かさい）として仕えていました。しかし当主の定正から糟屋の上杉館に招かれ暗殺されました。その上杉館は上糟屋にあったとされていました。それが最近、下糟屋の丸山城址も可能性があるとなったことは先に紹介しました。

『史跡と文化財のまち』五二頁～に「上糟屋神社の裏手に、東南から北西にかけて空堀跡がある。空堀の先一帯は上杉館跡と言われ、相模野を一望できる。館跡一帯は「立っ原（＝館原）」といわれ、西に「ませぐち（＝馬防口）」、東に「まとば（＝的場）」などの地名が残る。周辺で何回か発掘調査が行われたが、まだ上杉館を特定するには至っていない。」と書かれています。

『風土記稿』（三七二頁～）にも上杉館のことが出ています。

上杉修理大夫定正館跡　今、その地詳らかならず。当時、糟屋館と称し、定正久しく居住せし事、古証文に見えたり。〈曰く、**老拙二十余年、於糟屋 川越、旦暮之雑談懸心**…。

ここでは上杉館は「糟屋館」となっています。定正が、自分は二十年間を糟屋、川越で過ごしたと書いているのです。この一文に引き続き、次の一文もあります。

文明十八年（一四八六）七月、定正、太田道灌をこの館にて誅戮（ちゅうりく）す。【小田原記】に曰く。「長享元年（一四八七）、山内顕定、憲房、扇谷修理大夫定正を退治あるべきと聞こえければ、**朝良**（定正の養子）**は糟屋に在りながら、**川越に曽我を籠め、小田原に大森式部少輔を籠めしかじか。

山内顕定らが扇谷定正を攻めるといっているとき、扇谷定正の養子の朝良は糟屋にいたと読めます。上杉館が上・下糟屋のいずれかにあったことは歴然としていますが、その場所がまだ突き止められていないのです。

一説に、道灌の墓の北側に上杉館を囲む堀跡があるといわれていますので、とりあえず向かってみました。確かにしばらく行くと東西に長い窪地がありました。窪地を越えるために道路は下が

って、また上がっています。上がった所の台地は住宅地になっていました。この台地を屋敷跡というのかなと思い、辺りを見回すとフェンスで囲まれた広い畑があり、先に紹介したように発掘調査されていたのです。引っ張り回された参加者の皆さんには文字通りのご足労を掛けました。私たちは「道灌塚前」のバス停まで戻り、この日の史跡・文化財めぐりを終えました。

（二〇二三年四月六日　記）

〈引用・参考資料〉

『新編相模国風土記稿』雄山閣版第二巻
『史跡と文化財のまち　いせはら』平成二十六年伊勢原市教育委員会刊
西股総生『首都圏発　戦国の城の歩きかた』ＫＫベストセラー二〇一七年刊
湯山 学「上杉定正の館」　シリーズ　中世関東武士の研究五巻所収　一二〇一二年戎光祥出版刊
西股総生他『図説日本の城郭シリーズ①　神奈川中世城郭図鑑』戎光祥出版二〇一五年刊
『伊勢原市史』六通史編（先史・古代・中世）　伊勢原市平成七年刊
『伊勢原市史』別編　民俗　伊勢原市平成九年刊
梅田義彦・菱沼 勇『相模の古社』学生社一九七一年刊

参加者の声

伊勢原市糟屋地区の史跡巡りに参加して

前田照勝

三月十二日(土)に開催された伊勢原の史跡巡りに参加しました。今回の参加者は一五名です。

幾つかのポイントを経て⑥番目の「上粕屋神社」に無事に到着。説明を受け、ここで全員の記念写真を撮りました。最終の⑦番目は、～ 時間があれば上杉館跡 ～ と資料に記してありました。

ここで、ガイド役の平野会長から「この後の上杉館跡はどうしますか？」との問いかけがありました。

「せっかくここまで来たんですから行きたいです！」

私は間髪を入れずにそう答えました。すると、熊澤事務局長が「前田さんがそう言うなら行きましょう！」と応じてくれたので

す。

声にならない声が聞こえた気がしました。「えっ行くの？みんなが行くなら行きましょう」

平野さんは「こちらで待っていてもいいですよ」と念を押されました。特に反対意見も無く、すぐに歩き出しました。内心やれやれと思いました。

実は、この日の行程はいつもの史跡巡りよりも徒歩の時間が多かったのです。誰もが疲れ気味になっていました。平野会長に「どうしますか？」と問われたとき、消極的な意見が出ると最終目的地は断念しなければなりません。そこでやや強行と思いつつも発言したのです。

歩き始めると皆が元気になりました。大山からのなだらかな斜面が広がっています。畑の中に大きな家が点在し、門から母屋にたどり着くには時間を要すると思われる家が幾つもありました。敷地の中にロータリーのある家もあります。廃品回収の大きな会社もありました。あっちを見たり、こっちを見たり、初めて歩く場所は興味津々です。歴史上のポイントも大切ですが、初めての地域の人の暮らしぶりを見られるのは嬉しいものです。

坂道を下り、道は上りになりました。かなりの傾斜でさらに上へと続いています。

「どこまで行くんだろう？　目的地はまだだろうか？」。誰もがそんな風に感じていたのではないでしょうか。

タイミングよく、ここで平野会長から声がかかりました。

「もう進まなくていいです。この高台一帯が上杉館跡と思われます」

全員が一つになり説明を聞きます。

「今登ってきた低地の部分は空堀跡でしょう」

説明を受けながらキョロキョロ周囲を見渡していると、目の前の土手が気になりました。高さは三㍍くらいでしょうか。オレンジのネットが張ってあります。その向こうが気になったのです。思いついたらすぐ行動と、咄嗟にその土手を上がってみました。

何ということでしょう！　目の前には発掘調査の現場が広がっていたのです。私は感動を覚えました。何人かのメンバーが土手の上に登って確認しました。

下見では平野さんもこの場所までは来ていません。それなのに、想像の世界でズバリその目的地まで歩を進めていたのです。下見をしていなくてもしっかりとイメージを描いていたのですから驚きです。まさに資料を詳しく調べているからこその奇跡だと思いました。

この日、茅ヶ崎駅に戻ったのは十六時を過ぎていたので、そのまま解散となりました。反省会と称しての飲み会は残念ながら中止です。もしこの席があったなら、平野会長に拍手をプレゼントするところでした。

「平野さんのあのストップの場面はさすがだと思いました。拍手を贈りたいと思います。有難うございました！」

【これからの事業予定】

茅ヶ崎郷土会総会　５月３１日（水）１３時３０分から
茅ヶ崎市民文化会館大会議室にて（郷土芸能保存協会総会と連続して実施します。）

史跡・文化財めぐり　市内の大山道３（円蔵～西久保地区）
・事前勉強会６月１３（第２火　１３時３０分～）市立図書館大会議室
・実施日　７月８日（第２土）集合場所検討中

会報「郷土ちがさき」次号１５８号の発行は令和５年９月１日の予定です。調べたこと、読んだ本の紹介、日常雑感、短歌、俳句などの原稿を待っています。

二十三ヶ村調査会（中島郷土誌の編集）
毎月、第１・第３火曜日に実施中。場所は原則、市立図書館第２会議室。午後１時半からですが、勉強会と重なる日は、午前１０時から行います。

文化祭写真展　１０月２７日（金）～２９日（日）　市民文化会館展示室Ａにて（茅ヶ崎市スポーツ振興財団主催・茅ヶ崎市共催の茅ヶ崎みんなのアートフェス２０２３参加事業）

郷土芸能大会　１１月２６日（日）午後　市民文化会館小ホール

【これまでの事業報告】

今年の１月１日以降実施した事業中、史跡・文化財めぐりは先に紹介しました。中島郷土誌の編集も歩みは遅いですが進んでいます。そのほかに、１月２４日に加藤幹雄会員担当で「えな塚の話」の勉強会を行いました。また昨年に引き続き、コミュニティーセンター湘南から当会に依頼された「湘南地域の歴史を知ろう！」２回（３月１６・２３日）に平野会員が出向きました。

【１５６号正誤表】
７頁上段タイトル「孫娘と見た鎌倉倉殿の十三人」→「孫娘と見た鎌倉殿の十三人」
８頁上・下段「鎌倉殿の十三人　感想　思いつくままに書いてみます」は一部分修正し、全文の文体を変えて当会ＨＰに再掲してあります。

【編集後記】
原稿をお寄せ頂いた皆さんにお礼を申し上げます。市内下寺尾と伊勢原市の史跡めぐりに参加された会員から、同行の記が届きました。編集子としましては事業がどのように受け止められているのかは知りたいところなのでありがたい事でした。訪ねたい地、見たい所などお知らせください。参考にさせていただきます。どうぞよろしく。
会報の既刊号は会のＨＰでご覧になれます。下の二次元コードからどうぞ。　（編集子）

－300－

郷土会の会員募集
設立は昭和２８年（１９５３）、会員約８０人
年会費１５００円、力をもてあまし、やる気満々の人を募集中
連絡先　平野文明　（℡０４６７・５３・２４５３）